

## 看過された張我軍の「八丁大人的手記」

劉 海燕

### 1. はじめに

本稿は、これまで看過されてきた張我軍の小説「八丁大人的手記」について論じるものである。

張我軍は「日治時代文学道上的清道夫」<sup>1</sup>や「台湾新文学運動的奠基者」<sup>2</sup>などと称されている。1924年11月、張我軍は『台湾民報』<sup>3</sup>（以下『民報』）で旧文学への檄文「糟糕的台湾文学界」<sup>4</sup>（「めちやくちやな台湾文学界」）を発表した。これにより、台湾における新旧文学論争が始まり、<sup>5</sup>台湾新文学は本格的な創作期を迎えることとなった。<sup>6</sup>張我軍の新文学に関する評論文及び彼による台湾初の白話詩集『乱都之恋』<sup>7</sup>は、いずれも彼が台湾新文学史上において大きな存在であったことを物語っている。

一方、新詩以外に、張我軍は小説、散文も書いている。現在、張我軍の小説について言えば、「買彩票」<sup>8</sup>（「宝くじを買う」）、「白太太的哀史」<sup>9</sup>、「誘惑」<sup>10</sup>の三篇のみが知られており<sup>11</sup>、いずれも当時学生であった張我軍によって北京で書かれ、北京での経験をもとにした作品である。しかし、実際には、この時期における張我軍は、以上の作品とは異なり、唯一台湾を背景とした作品も創作していた。それが小説「八丁大人的手記」である。この小説は、「憶郎」というペンネームで書かれ、『民報』第167号（1927年8月1日）に掲載されている。小説では、退役して無職になった八丁野夫という主人公が植民地台湾の警察官になるまでの経緯が描かれている。

現在の張我軍研究においては、小説「八丁大人的手記」はまだ言及されていない。2007年張耀仁による「『台湾民報』刊載台湾新文学作品訳作（1927 - 1930）」という一覧表には、「八丁大人的手記 小説 憶郎（張我軍）」<sup>12</sup>と記載されている。これは、「八丁大人的手記」が張我軍によるものの最初の指摘であると思われる。しかし、なぜ「憶郎」は張我軍であるのかを指し示すのか、それについての説明は行われていない。結局、一覧表の中に現われたこの一行文は、張我

軍の研究者たちに小説「八丁大人的手記」に関する注意を促すことが出来なかった。これまでのように、「八丁大人的手記」はまた見過ごされてしまった。

故に本稿では、まず、「憶郎」は張我軍のペンネームであること、つまり小説「八丁大人的手記」は張我軍の作品であることを検証する。次に、作品の内容を分析し、創作に関する諸問題を検討する。最後に作品の創作意義を探求する。

## 2. 作者に関する検証

張我軍は生涯を通じて多数のペンネームを用いている。早年から張我軍の研究に携わった秦賢次はかつて彼のペンネームを収集し、「台湾新文学運動的奠基者——張我軍」という論文の中で計十八個挙げている。その中でよく知られているのは「一郎」である。「一郎」は張我軍の字でもあり、彼が『民報』で発表した文章は、本名以外はほとんどこのペンネーム「一郎」で書かれたものである。秦賢次の前掲文では、「一郎」と発音で似ている「憶郎」<sup>13</sup>もペンネームの一つとして挙げている。しかし、なぜ「憶郎」が張我軍のペンネームであるのかについて、秦賢次は触れていない。

1927年3月15日、北京にいた台湾人留学生張我軍、蘇維霖、洪炎秋、宋文瑞、吳敦禮らは雑誌『少年台湾』<sup>14</sup>を創刊した。創刊号には「憶郎」という署名による「台湾閒話」という文章が発表されている。該文は「一、弱少民族的悲哀」と「二、我們要求什麼」という二つの部分から構成されている。第一部分において、作者は『民報』で報道された台中大肚溪住民の土地が退職官吏に払い下げられることを批判し、<sup>15</sup>台湾総督府の専制統治を非難する一方で、弱少民族であった台湾民衆の悲惨な境遇を慨嘆している。1926年雑誌『改造』（東京）の5月号に、日本のマルクス主義者山川均は「弱少民族の悲哀」、副題「『一視同仁』『内地延長主義』『醇化融合政策』の下に於ける台湾」という文章を発表した。作者は経済、政治、思想という三つの方面から日本の台湾統治を分析し、痛烈に批判している。彼はその中で当時の「二林事件」を引き起こした台湾竹林の「払下問題」を論じている。該文は発表された同月の16日に、すなわち『民報』の第105号にその中国語の訳文が現われた。それは当時『民報』の記者であり台北にいた張我軍が実名「張我軍」で訳したものである。張我軍が訳した「弱少民族的悲哀」は『民報』第105号から115号まで（5月16日-7月25日、そのうち第111号には掲載されていない）計十回に渡って連載されている。後の8月北京に来た張我軍が魯迅を訪問した際に、自身の訳文「弱少民族的悲

哀」が掲載されている第113号から第116号の計四号の『民報』を魯迅に渡したことは、台湾文壇でよく知られている話である。

以上の記述に基づき、雑誌『少年台湾』で発表した「台湾閒話」の作者「憶郎」は、すなわち編集者の一人であった張我軍であり、「憶郎」は張我軍のペンネームの一つであると断定できる。したがって、小説「八丁大人的手記」は張我軍によるものだと断言できる。一方、小説の解説部分のおわりにおいて、作品の創作時間と場所を示すと思われる「六月二十七日北京」という文字が書かれており、これらも当時北京にいた張我軍の状況とも合致している。管見によれば、張我軍はペンネーム「憶郎」を用いて発表した文章は上述の二篇しかない。すなわち雑誌『少年台湾』の創刊号で発表された「台湾閒話」と後に『民報』で発表された「八丁大人的手記」である。「憶郎」は張我軍の字であり、よく用いられたペンネーム「一郎」とは発音で似ているが、しかし、あまり使用されていなかったため、ほとんど知られなかったようである。これは小説「八丁大人的手記」が見落とされてきた原因の一つであると思われる。

### 3. 作品の内容

小説「八丁大人的手記」は、「題解」（すなわち解説）と本文の二つの部分から構成された、計二千字余りの作品である。

解説の部分においては、作者「私」が「八丁大人的手記」の由来について述べている。「私」は春に「蓬莱仙島」を遊歴した際に、その近くの大圓島で一冊のノートを手に入れた。それは大圓島警察界の耆宿<sup>きしやく</sup>であった八丁野夫が、警官としての自らの生涯を記録したものであった。その中には、大圓島でしか起こりえない、とても奇妙な出来事が忠実に記述されていた。「私」は是非ともこのノートを世に公開し、人々の見聞を広めたいと思い、「八丁大人的手記」というタイトルをつけて発表することにした。タイトルに「大人」という言葉を用いているのは、主人公がかつて警察官という身分及び彼への敬意を表すためである。「手記」という言葉の使用は、本来このノートは八丁大人が自ら書いた日記のようなものだからである。しかし、八丁大人の文章は非常に下手で、かつ文字も読みにくいため、「私」はいつ写し終わることができるかまだ予想できない。そして、小説は解説から本文へと移る。

ストーリーは主人公が警察官になる直前から始まる。鹿児島出身の主人公八丁は、三年の兵役生活を終えたが、実家の農業を嫌い、ついに都会へ赴き、生

計の道をはかる。しかし、尋常小学校さえも卒業していなかった八丁を雇ってくれるところはなかなか見つからなかった。ちょうど困っていたところに、旅館の主人から大圓島政府が巡査官を募集しているという情報が入った。高等小学校卒業という採用条件があったが、しかし、実際には「応募する人は皆無職の遊民だよ。しかも、ほとんどの人は尋常小学校も出ていないんだよ。もっとひどいのだと、字も読めない人でも採用されたんだよ！」<sup>6</sup>と旅館の主人に勧められて、八丁は試しに応募しに行った。結局、主人の言った通りであり、八丁は学歴欄を巡査募集担当者の指示で「高等小学校卒業」と書き直して、無事に合格することとなった。小説は、「昇官発財」(官位が高くなり、金持ちになる)の夢を抱いた八丁が三日後に大圓島へ出発するところで終わっている。

作品における主人公八丁は、野良仕事の辛さに耐え切れず、都会に行ったのであるが、この描写から、八丁は怠け者のイメージが読み取れる。都会で苦力(クーリー)の仕事さえ見つけられなかった八丁は、学歴を改ざんして、意外にも容易に大圓島の巡査官に採用された。ここで作者は、台湾にきた日本人警察官は無知であり、もともと無職の遊民であったということを指摘している。高官となり、金持ちになるという夢を抱き、いよいよ台湾へ出発する八丁のその後の運命がどう展開していくのかは、結局連載中断のため、知ることが出来ない。しかし、作品解説の部分で紹介されたように、最後には大圓島警察界の耆宿<sup>しきよ</sup>となったという結末から、彼はきっとその夢を叶えたのであろうと推測される。作者は八丁野夫の生涯を通して、官位や金銭ばかり考えた無知な台湾日本人警察像を描こうとしたことを窺い知ることができる。後にその具体像をうまく浮き彫りにしたのは小説「他発財了」(『民報』第202-204号、1928年4月1-15日)の作者であった陳虚谷と「奪錦標」(『民報』第374-376号、1931年7月25日-8月8日)を発表した蔡秋桐という二人の作家が挙げられる。

内容から「八丁大人的手記」は比喩的な表現手法で創られ、風刺に満ちた作品であることがわかる。主人公を八丁野夫と名づけたことは、作者の皮肉の意思を明白に表している。八丁という言葉は巧者・達者などの意で、やや軽んじていう語であり、野夫は無知で野蛮なことを含意している。物語の場所は「蓬莱仙島」の近くの大圓島であるが、「蓬莱仙島」や「大圓島」は、いずれも昔からの台湾島の別称である。また、主人公は生涯、大圓島の警察官として過ごしたことから、彼が退役して警察官になる頃、すなわちこの作品に描かれた時代は、台湾植民地時期の初期であると推測される。小説は、主人公が台湾の警察

官になったばかりのところまで終わっているにもかかわらず、作者は八丁野夫という人物を通して、台湾における日本人警察官の本質を指摘し、植民地台湾の統治を批判しようという意図が読み取れる。

#### 4. 掲載中断について

解説の内容から、作者はこの小説を連載する意欲が容易に読み取れる。また、その考えは物語の流れからも窺い知ることができる。しかし、実際にはこの小説はこの一回で終わってしまい、続編はなかった。このことについて、『民報』の余録欄には二つの記事が残されている。一つは、『民報』第 168 号（1927 年 8 月 7 日）、すなわち本作品が発表された次号の『民報』に記載された「憶郎君の『八丁大人的手記』の続編はまだ届いておりませんので、どうかご容赦下さい」<sup>17</sup>という通知である。もう一つは、第 172 号（1927 年 9 月 4 日）に載っている。その内容は以下の通りである。

前日掲載された「八丁大人的手記」については、ただいま憶郎君からのお手紙が届きました。特別な事情により、この続編は続けられないという内容でした。読者の皆様どうかご勘弁下さい<sup>18</sup>

前者によれば、張我軍と『民報』の間には投稿の約束があったと窺える。また、『民報』の編集者は「八丁大人的手記」の続きを待っていたことも推測される。この記事を書いた『民報』第 168 号には、文芸作品が掲載されていないことはその推測の裏付けとなる。1927 年 8 月（第 167 号）から 1932 年 4 月（第 420 号）日刊紙になるまでの『民報』には、文芸作品を載せなかったのはただ第 168 号、第 271 号、第 278 号の計三号のみである。第 168 号の『民報』にはもともと「八丁大人的手記」の続編が掲載されるはずであったが、しかし、何らかの原因で、その続編は予定通りに届かなかった。その理由は、後者の記事を通して、まだ執筆されていなかったことが明らかとなる。小説の発表から、結局続編中止という内容の手紙が届くまでの間は一ヶ月過ぎた。その期間中の張我軍はきっとこの小説をつづけて書こうという気持ちがあったに違いない。しかしながら、結果的に作品は中途半端なものとなってしまった。

実際、張我軍の作品の中では、翻訳作品「愛慾」及び散文「南遊印象記」も未完成のものである。「愛慾」は武者小路実篤が雑誌『改造』の 1926 年の新年

号に発表した劇作である。張我軍は『民報』の第94（1926年2月28日）号及び第95号（3月7日）のこの二期にわたって、原作第一幕の訳文を発表した。しかし、つづきの第96号（3月14日）の「餘録」には、この作品掲載中止の記事が掲載されていた。それは「前号に掲載された『劇曲愛欲』は、特別な事情により、その続編は続けられませんでした。読者の皆様、どうぞ、お許してください」<sup>9</sup>という内容である。一方、同号に掲載された「南遊印象記」（五）も文末には「待續」（続き）という文字が書かれていたにもかかわらず、実は最終回となっている。そして、以降の二ヶ月間の『民報』には張我軍の姿は見当たらなかった。後の6月に、張我軍は妊娠していた妻を携え、台湾を去って北京で新しい生活の幕を開いた。この二ヶ月の間には、張我軍はおそらく新生活の準備のために北京に行ったと思われる。結局、このような「特別な事情」で、上述の二つの作品は連載中断に至ったと考えられる。張我軍不在の状況は前年の『民報』でも起こっていた。1925年4月の下旬から6月の下旬まで、新旧文学論争中の『民報』では、張我軍の姿が消えていた。これは家の強制結婚にせまられた彼の婚約者、北京娘羅心郷を台北へ迎えるため、張我軍が急いで北京に行ったからなのである。<sup>10</sup>以上の二つの空白期間を除けば、『民報』記者の在職期間において、張我軍はほぼ毎号に文章を発表していた。

さて、張我軍に小説「八丁大人的手記」の執筆を中断させた「特別な事情」は、一体何であろうか。張我軍の年表では、<sup>11</sup>この1927年には、3月15日の彼が編集を務めた雑誌『少年台湾』の創刊後、10月に国立北京師範大学に編入したということのみが記されている。8月中に書かれたはずの「八丁大人的手記」の続編が続けられないという手紙の内容における「特別な事情」とは、この年の10月に私立中国大学から国立北京師範大学に編入するための準備であろうか。或いは単に学業と生活を両立させるため、創作の余裕がなくなったという理由であろうか。いずれにしても、後に張我軍は小説「誘惑」を発表したものの、「八丁大人的手記」を続けて書く気配はどこにも見当たらなかった。

1926年6月に北京に来た張我軍は、学業に没頭する一方で、次第に北京での生活に馴染んでいく。そして、時間や空間を隔てた故郷台湾も次第に彼の生活から遠く去っていくように見える。この間に書かれた「買彩票」、「白太太的哀史」と「八丁大人的手記」という三つの小説には、創作背景において北京と台湾という違いがあったが、台湾と関係している人物はいずれの作品の中でも現われている。しかし、1929年4月に発表された「買彩票」では、台湾を連想さ

せる内容は少しも窺えなかった。仕事と生活の窮地に陥った主人公のある青年は、来る7月の卒業後の進路に悩まされている作者自身のことを暗示しているかもしれないが、作品の描写からみれば、作者の台湾出身であることはまったく匂わせなかった。「誘惑」は張我軍の最後の作品であり、『民報』における彼の最後の執筆でもある。これをもって、張我軍は彼の台湾新文学史上の一頁にピリオドを打った。

## 5. 創作に関する検討

小説「八丁大人的手記」は1927年8月1日『民報』第167号に掲載されている。『民報』第167号は、民報編集者たち念願の台湾発行の第一号である。東京から台北に移り、本島での発行が実現することに伴い、『民報』は中文のみの雑誌から中日文併用誌へと変わった。それとともに、これまでの「学芸欄」は中止され、かわりに中文版面の最終ページは文芸版として設置され、文学作品はすべてそこに掲載されるようになった。「八丁大人的手記」はまさに『民報』文芸版に掲載された最初の小説であり、それも『民報』が三ヶ月の「文学空白期」を経て最初に現われた作品でもある。偶然とは言え、その空白期に至る直前の『民報』に掲載された作品は、張我軍の「白太太的哀史」なのである。1926年6月、張我軍が『民報』を離れた以後、翌年8月『民報』の台湾発行を実現するまでの一年余には、『民報』に掲載された文学作品数がとても少なかった。この状況は『民報』を見渡せばわかる。(その原因についての探求は別稿に譲りたい) また、この時期の「学芸欄」を大いに支えたのは、「兄弟」(『民報』第119号、1926年8月22日)、「黄昏的蔗園」(第124号、1926年9月26日)、「加里飯」(第138号、1927年1月2日)という三編の小説を発表した東京での楊雲萍と「買彩票」(連載、計三回)及び「白太太的哀史」(連載、計五回)を創作した北京での張我軍の二人であることも窺い知ることが出来る。

ところで、『民報』においてしばらく文学作品が現われていないという実情があったにもかかわらず、すでに6月末に書き上げられたと思われる「八丁大人的手記」は、その発表は延期され、一ヶ月後の『民報』の台湾発行が実現した8月1日となったのである。<sup>2</sup>それはただの偶然であろうか。それともわざわざ台湾発行に合わせて、その時機を待っていたのであろうか。筆者は後者の可能性が高いと思う。もしそうであれば、小説はもともと台湾発行を迎えるために、『民報』編集者の依頼のもとで創られたとも考えられる。では、張我軍はなぜ

このテーマを選んで小説にしたのか。彼のほかの三編の小説はいずれも若い青年の身の周りの出来事をもとにして書かれたのである。これらの作品と対照してみれば、すでに台湾を去って一年経った頃に、台湾の日本人警察官を描写対象として、作り上げたこの作品はやや不思議に思われる。

日本の植民地台湾統治は朝鮮の「憲兵政治」の統治と違い、「警察政治」である。台湾全島の警察統治制度の確立は、1899年第三任台湾総督乃木希典による「三段警備制」が廃止された後のことである。この制度は、生物学の視点から「鯛の目とヒラメの目」という差別的な植民地経営方針を主張した、当時の総督府民政長官後藤新平によって作られたものである。<sup>2</sup>植民地台湾における警察官は、単なる治安維持の職務以外に、阿片の取り締まり、保甲監督、蕃界交通監視、食塩、樟腦専売の管理などあらゆる方面に関与していた。「事実より言へば、總督府の手足となつて、直接に人民に接觸するものは、警察であり、人民の耳目に觸るる所の官吏は、ただ警官のみであった」。<sup>3</sup>植民地台湾における警察は、実に「泣く子も黙る」<sup>4</sup>ほどの恐ろしい存在である。台湾の警察は、植民地専制統治の先兵である一方で、当然として被植民地統治者である台湾民衆に直接に批判される対象でもある。

日本統治期において、「台湾人唯一的言論機關」としての『民報』では、台湾における日本人警察官の悪行がしばしば報道されている。そのような記事は数えきれないほど多い。当時、『民報』の記者であった張我軍もいくつかの警察に関する評論や記事などを書いている。例えば、「警察當局聽著!」（第44号、1925年2月1日）、「臺灣的巡查都是這樣的」（同前）、「看了警察展覽會之後」（第83号、1925年12月13日）などである。また、実際に張我軍が直接日本人警察官と衝突したこともあったと思われる。1925年3月24日、台北で開いた孫中山の追悼大会において、張我軍が記念演説を行った。しかし、当局の禁止により彼が書いた「孫中山先生弔詞」は会場で読み上げることができなかった。<sup>5</sup>1924年11月から1926年6月までの一年半の間に『民報』の記者として台湾で得た体験は、後に張我軍が小説「八丁大人的手記」を創作する際の基礎となったと考えられる。1927年3月、『民報』で報道された大肚住民の土地の「払い下げる」記事に惹かれた北京にいた張我軍は、雑誌『少年台湾』創刊の際に怒りを込めて「台湾閒話」を發表し、台湾政府の「残酷野蛮専制」を痛烈に批判した。そして来る8月の念願の『民報』台湾発行が実現する際に、今度、張我軍は同じペンネーム「憶郎」を用いつづけ、文学作品を通してその怒りを表わそうと



していたと思われる。

作品において、張我軍は主人公八丁が警察官になるまでの経緯を通して、台湾における日本人警察官の一側面を描き出している。つまり、「大人」という敬称が与えられた警察官は、実際は不精かつ無知な遊民だったのである。ここでは、台湾警察官の素質劣化の問題に対して、作者は厳しく批判している。1927年9月4日、『民報』第172号に、「警察制度改革の必要——提高警吏素質・縮小警務権限」（無署名）という文章が発表された。この文章において以下の内容が記されている。

現在、台湾警察界欠陥の病原は、差別待遇という統治方針がその根本的な源であるが、しかし、それ以外の病原はほかでもなく、官吏素質の不良と権限過大である<sup>27</sup>

該文では、台湾における日本人警察官の素質の悪さについてはっきりと指摘している。さらに、この素質の悪さは台湾における日本人警察の悪政を招いた根源の一つであると明確に指し示している。つまり、植民地台湾の専制統治を悪政に至らせた根源の一つは統治者の代表であった日本人警察官の素質の悪さなのである。張我軍が一人の日本人警察官の生涯をめぐって小説「八丁大人的手記」を創り出したのは、まさにこの認識のうえで取った行動といえよう。

## 6. 作品の意義

植民地台湾の警察官と台湾民衆の間に生まれた矛盾は、日本統治期における台湾人作家たちが創作する際の重要なテーマとなっている。文学作品を通して、暗黒の植民地統治をさらけ出し、またそれに抵抗するという意図のもとで、植民地統治者の代表であった日本人警察官は各方面から描写されている。頼和の「一桿秤仔」<sup>28</sup>、楊雲萍の「光臨」<sup>29</sup>、陳虚谷の「他發財了」<sup>30</sup>、蔡秋桐の「理想郷」<sup>31</sup>などの作品には、いずれも日本人警察官が登場している。このように、多数の台湾人作家が日本人警察官に関する作品を書いているという点から見れば、同様に台湾における日本人警察官を取り上げ創作した張我軍の「八丁大人的手記」は、当然珍しいものとは言えない。しかし、現実社会のほぼ一場面のみを取り上げて描写するという作品とは異なり、張我軍が一人の警察官の生涯を通して、歴史的視点から台湾の日本警察の実態を探ろうとしたという考えは、特

別であると言えよう。また、台湾新文学において、この小説がはじめて日本人警察官を主人公にしたという点も挙げられる。さらに、当時北京留学中の張我軍が書いたこの作品における流暢な白話文の使用及び簡潔かつ明瞭な叙述という点も評価すべきであろう。

しかし、描写の技巧から見れば、作品「八丁大人的手記」は同期の頼和や楊雲萍などによる作品に劣っていると言わざるを得ない。また、作者張我軍の他の作品と比較しても、それらには及ばないことも分かる。作品に用いられた諧謔の口調及び解説から本文に至るといふ書式は、いずれも旧小説の中でよく見られる描写方法である。このような描写方法は、「無知」というペンネームで書かれた台湾新文学における最初の白話文小説「神秘的自制島」<sup>2)</sup>においても用いられており、両者の間には多数の類似点を見出すことができる。

一方、前述のように、張我軍によって北京を背景として作られた他の三編の作品に対して、同じ北京で書かれたにもかかわらず、「八丁大人的手記」は台湾を背景としているという特別の事情を有している。また、この作品は張我軍の唯一未完成の小説でありながら、唯一彼自身と関わりのないフィクションの小説でもある。張我軍は「我々が詩や文を創作する際に重要なことは、自分で聞きした、自らの経験をすべて自分の言葉で描写することである」<sup>3)</sup>と主張している。実際、張我軍の作品を見れば、彼は確かに自らの主張を実践していることが分かる。詩集『乱都之恋』は、彼と妻との恋愛経験に基づいて書かれたものである。小説「買彩票」の中には、張我軍の第一回目の北京留学の時、お金が底を尽きたため、やむを得ず帰台する前の心境が映し出されている。「白太太的哀史」においては、日本語の通じる話し手であった「私」が「これ（物語）は昨年冬のことである。私は再び北京に来てわずか数日のことである」（這是去年冬天的事。我重到北京才幾天）という内容を語っている。この内容は作者張我軍が前年の夏に再び北京に来たという実際の状況とほぼ一致している。また、小説「誘惑」の舞台となっている「来今雨軒」は、当時張我軍がよく利用していた喫茶店である。以上の作品においては、いずれも作者張我軍の姿が捉えられる。しかし、小説「八丁大人的手記」は、その内容によれば、張我軍と主人公八丁との間には直接的関わりがなく、作られた物語である。結局、この作品は、張我軍の唯一の未完成の小説となったのである。張我軍の作品は「私小説」ともいえる。自身の周りの出来事を題材にして書かれた小説には、主人公を通して作者自身の苦悶、不満、怒りまた欠点がリアルに再現され、心理描写がよ

くできているといえる。しかし、作品の中に自分を盛り込まず、客観的な視点から、現実社会を反映するというテーマの小説を創作する際に、張我軍の社会現実への描写能力や作品の構造力は欠けているように見える。旧小説の描写手法で書かれ、しかも結局失敗に終わったこの小説「八丁大人的手記」の存在は、この推測の裏付けとなる。

従来の研究においては、張我軍の「買彩票」「白太太的哀史」「誘惑」の三編の小説はいずれも彼の北京での体験をもとにした作品であるため、張我軍の台湾作家文壇における位置は曖昧にされてきた傾向があった。林瑞明はかつて以下のように述べている。

二十年代張我軍のこの三篇小説に基づいていけば、彼が伝えたのは北京での体験であり、しかも（いずれの作品でも）洗練された中国白話文で書かれたのである。ここでは、少しも台湾作家である色彩が見えなかった。これらの文章が、『台湾民報』に掲載され、模範的な影響を及ぼしたのであるが、張我軍の文学的表現は、結局中国文壇、それとも日本統治期の台湾文壇の中に位置づけて考察すべきなのか、これは更なる考察が必要であろう

34

ここでは、林瑞明は張我軍の台湾文壇における位置づけを再検討すべきだという問題を提起した。その理由は彼の三編の小説が伝えたのは彼の北京体験であり、作品の使用言語は洗練された中国白話文であるため、少しも台湾作家である色彩が見えなかったためである。この内容から、台湾作家の示す色彩とは一体どのようなものであろうかという疑問が生じる。もし林氏のいわゆる台湾作家ではない色彩、つまり上述の内容を認めるならば、これらの北京での体験の主体はすべて台湾出身の作者自身という実情はどう解釈すべきであろう。これらの問題はさておき、本稿で検討した台湾現実社会の一側面が描かれている小説「八丁大人的手記」は、少なくとも林氏のこのような張我軍に関する台湾作家の位置づけの定義の有力な反論となると思われる。林瑞明に対して、葉石濤は『台湾文学史綱』において、張我軍のことを「剷根」<sup>34</sup>された（根が掘り出された）作家であると結論づけている。その理由は北京での生活をもとにした張我軍の作品が、台湾の現実とはまったく関わっていないからである。ここでは、作品の内容（さらに言うならば、物語の舞台の設定）のみによって作家を

位置づけて良いのであろうかという疑問が残る。その判断基準の妥当性はともかく、もしこのようにして位置づけを行うならば、張我軍の台湾を背景にした「八丁大人の手記」に対して、如何なる役割を担わせるのか。もちろん、「八丁大人の手記」を文学作品の面から見れば、そのスタイルも旧小説の枠から脱することができず、またストーリーとしても不完全な形であることは否定できない。しかしたとえそうだとした場合、この作品の存在によって、張我軍の創作がもっぱら北京体験を拠所に行っているとは言えず、また単に描写内容のみを取り上げて作家を位置づけるといった判断基準も張我軍研究においては適用できないと思われる。

## 7. おわりに

上述した葉石濤および林瑞明の張我軍の台湾文壇における位置づけは、彼の小説「八丁大人の手記」の出現によって崩れてしまった。ここでは、筆者は両者の張我軍に関する位置づけの是非を判断しない。ある作家の文壇位置を評価する際に、彼の作品だけではなく、彼の文学に関するあらゆる活動も視野に入れなければならないと考えているからである。少なくとも台湾新旧文学論争を引き起こした張我軍を検討する場合には、そのような考えを持たなければならないと考えている。一方、不思議なことに、葉石濤であれ、林瑞明であれ、かつて張我軍についてそれぞれ「新文学揺籃期代表性作家」<sup>36</sup>、「台湾新文学運動的先鋒旗手」<sup>37</sup>と評価している。同一研究者が同一研究対象に対して、前後に異なる結論を得たのはどう理解すればよいであろうか。また、この自己矛盾の現象が起こった原因は何であろうか。これらの問題は今後の張我軍研究の課題にしたい。

※ 本稿は、2008年12月6日の日本台湾学会第6回関西西部会研究大会にて、口頭発表したものに大幅な加筆修正を行ったものである。

### 注

- 1 葉寄民「張我軍及其詩集『乱都之恋』——日治時代文学道上的清道夫」を参照。張光正編『近観張我軍』、台海出版社、2002年1月、301 - 315頁。
- 2 秦賢次「台湾新文学運動的奠基者——張我軍」、張光直編『張我軍詩文集』、純文学出版社、1989年。本稿では、『台湾作家全集——楊雲萍、張我軍、蔡秋桐合集』（前衛出版社、2004年8月）に再録されたものを参照している。129 - 153頁。

- 3 『台湾民報』は1923年4月15日、東京の台湾人留学生によって創刊された半月刊の中文雑誌である。1927年8月、『台湾民報』は台北に移り、そして、改名誌の『台湾新民報』時期の1932年4月に、名実相伴う日刊新聞となった。
- 4 『民報』第2巻第24号、1924年11月21日。
- 5 1920年台湾青年たちによる新文学運動が発足する前に、文学改革に関する論説はすでに現われていた。しかし、これらの文章はほとんど旧文人によるものであり、形式上も漢文の域を脱していないため、旧文学改良の試論であると言わざるを得ない。台湾新旧文学過渡期における旧文人の文学改革については、黄美娥の『重層現代性鏡像——日治時代台湾伝統文人的文化視域与文学想像』（麦田出版、2004年12月）を参照されたい。
- 6 張我軍が惹き起こした台湾新文学論争が始まる前に、新文学に関する作品はすでに現れていた。しかし、これらの作品は、ほとんど「一作家」による白話文での試作であり、旧文学に代わって新文学を創ろうという意識の下で作られたものとは言えなかった。1925年8月、新旧文学論争及び中国新文学作品紹介の最中であった『民報』において、頼和の散文「無題」（第69号）が発表された。頼和は後に「台湾新文学の父」と称され、彼の登場は、台湾新文学における本格的な創作期の到来を意味する。
- 7 白話詩集『乱都之恋』は、1925年12月に台北で出版され、計55首の新詩が収録されている。1987年、遼寧大学出版社より再版される際に、「弱者的悲鳴」（『民報』第61号）と「孫中山先生弔詞」（『伝記文学』第6巻第3期）という二首が新たに追加された。
- 8 『民報』第123 - 第125号、1926年9月19日 - 1926年10月3日。
- 9 『民報』第150 - 第152号、第154号、第155号、1927年3月27日 - 1927年5月1日。
- 10 『民報』第255 - 第258号、1929年4月7日 - 1929年4月28日。
- 11 『張我軍全集』においては、1945年1月に発表された「元旦の一場小風波」（『芸文』第3巻第1期）も小説として扱われているが、しかし、この作品は張我軍の幼い頃に起きた祖母との間のある出来事が描かれたものであり、内容的にはエッセイに属するものだと思われる。『張我軍全集』は、張我軍の長男である張光正が編集を務め、2000年台海出版社により出版された。2002年、人間出版社によって、同書は台湾でも出版された。本稿では台湾版を参照している。
- 12 張耀仁「想像的『中國新文學？』——以頼和接任學藝欄編輯前後之『台灣民報』為析論對象」、『青年文學會議論文集——台灣現當代文學媒介研究』、文訊雜誌社、2007年。
- 13 単語「一」の中国語の発音は母音「i」の声調の第一声である。「憶」はその母音の声調の第四声である。
- 14 『少年台湾』は、当時北京に留学していた台湾の青年張我軍、蘇維霖、洪炎秋、宋文瑞、吳敦禮などが1927年3月に創刊した月刊誌である。創刊して約一年後に停刊となった。注2の第140頁を参照のこと。筆者は創刊号（コピー）のみを見たことがある。

- 15 この報道について、詳しくは記事「大肚庄民與退官者爭議」（『民報』第 106 号、1926 年 5 月 23 日）及び「大肚農民痛切陳情」（『民報』第 136 号、1926 年 12 月 19 日）などを参照されたい。
- 16 原文：應募的人都是些無職的遊民。並且大部分連尋常小學都沒有畢業過。甚者。目不識丁的人也被收去呢！
- 17 原文：憶郎君的「八丁大人的手記」續稿未到。幸其諒之。
- 18 原文：前所刊的「八丁大人的手記」、頃接憶郎君來書謂因有特別事情不能續稿云。敢望讀者原諒之。
- 19 原文：前號所載『戲曲愛慾』因有特別事情、不能續稿、請讀者原諒。
- 20 洪炎秋「懷才不遇的張我軍兄」を参照、張光正編『近觀張我軍』、13 - 22 頁。
- 21 『張我軍全集』を参照。
- 22 当時、北京にいた張我軍は東京にあった週刊紙『民報』に投稿する際に、おおよそ二週間がかかっている。彼の初小説「買彩票」は、1926 年 9 月 6 日に書き上げられたが、19 日に発表されたのである。
- 23 伊藤潔『台湾』、中央公論新社、2003 年 5 月 25 日（1993 年 8 月 25 日初版）、85 - 87 頁。
- 24 鶴見裕輔『後藤新平』第 2 卷、勁草書房、1965 年 9 月、151 頁。
- 25 伊藤潔、前掲書、87 頁。
- 26 「臺灣有志開孫先生追悼會」を参考。『民報』第 51 号、1925 年 4 月 11 日。
- 27 原文：現在台灣警察界的缺陷的病源、雖是發自差別待遇的根本的統治方針、但是其餘並發的病源乃是官吏的素質不良與權限過大。
- 28 『民報』第 86 号、1926 年 1 月 1 日。
- 29 『民報』第 92 - 93 号、1926 年 2 月 14 日 - 1926 年 2 月 21 日。
- 30 『民報』第 202 - 204 号、1928 年 4 月 1 日 - 1928 年 4 月 15 日。
- 31 『台湾文芸』第 2 卷第 6 号、1935 年 6 月 10 日。
- 32 無知「神秘的自制島」、『台湾』第 4 年第 3 号、1923 年 3 月 10 日。
- 33 「請合力折下這座敗草穢中的破舊殿堂」、『民報』第 3 卷 1 号、1925 年 1 月 1 日。  
原文：我們作詩作文、要緊是能將自己的耳目所親聞親見所親身閱歷之事物、個々自己鑄詞來形容、描寫。
- 34 林瑞明『台湾文学の歴史考察』、允晨文化、2001 年 5 月、245 頁。原文：以二〇年代張我軍這三篇小説而言，他所傳達的都是北京經驗，並且是用純熟的中國白話文寫作，絲毫看不出台灣作家的色彩，雖然是在《台灣民報》發表，起了示範性的作用，但張我軍的文學表現，到底應該放在中國的文壇還是日據時代的台灣文壇來考察呢？這恐怕還需要一番斟酌。
- 35 葉石濤『台湾文学史綱』、文学界、1987 年 2 月、42 頁。
- 36 葉石濤「新文学搖籃期代表性作家張我軍」（1985 年）、張光正編『近觀張我軍』、278 頁。
- 37 林瑞明「撑起台湾新文学運動的大旗——張我軍和他的文集」（1976 年）、張光正編『近觀張我軍』、445 頁。